

あんたは一人じゃないよ

ある中学校一年生女子の作文です(「いじめQ&A」ぎょうせいより)。「いじめ」を考える一つのきっかけになるのではないかと思います。親子で読み合って、話し合ってみるのもいいですね。

すべての人は、生まれながらに人間らしく幸せに生きる権利があり、誰もその権利を侵すことはできないと、日本国憲法でも基本的人権の尊重が定められ、保障されている。それなのに、私達の周りには、差別やいじめが後を絶たない。

幼稚園の時からずっと変わらないこのクラスに、いじめがあると初めて知ったのは小学校四年生の時だった。いや、私は四年生の時まで知らないふりをしていたのだ。いじめの標的となるのは、おとなしいとか、背丈が低いとか太っているとかが、優しすぎて何か言われても言い返さない、といった人達だった。私は、その頃からいじめのり

ーダーに近づき、仲良くなった。自分がいじめの標的にされるのが怖かったからだ。リーダーの言うことは、何でもよく聞き、行動した。初めは無視、そして物をかくす。それがエスカレートしてノートへの落書き、ありもしない悪口を言うなどだった。いじめをするのは簡単なものがある。遊び半分という感じで、相手の気持ちなど考えもしない。いじめっ子達は楽しそうによく笑った。私もつられて笑ったりした。

しかし、後悔は物事をやって終わつた後にやってくるものだ。そして相手にした悪事は必ず、自分にもふりかかってくるものだということ強く感じた。

五年生の二学期のある日、私のノートがなくなっていた。それだけではなく靴もなかった。翌日、返ってきたノートは落書きだらけで、靴は汚れた上にぬれていた。誰も口をきいてはくれず、私は一人であることが多

くなった。初めて、いじめられた人の心の傷の痛さを味わった。私の心は何時も泣いていた。さびしくて、怖くて、悲しくて、心が痛くなることを初めて分かった。自分もいじめをしたこともあって、親にも先生にもつらい気持ちを伝えることができなかった。

これまで親や先生方は、いじめは悪いことだと、いじめで自殺した子の例をあげて話した。いじめに加わっていた時は、私達はそんなになるまではいじめないさ、と思った。事実、殴ったり、たたいたりすることはしなかった。しかし、ここで考える必要がある。無視は無言の暴力、物をかくすことはひきょうな行動の暴力、悪口を言うことは言葉の暴力だということを。中学生になった今だから言えることである。

私へのいじめが一月程続いた頃、新しい子が標的にされた。それは転校生のAさんだった。いじめのリーダーと二、三人が来た。「あいつちよつとムカツクよね」とリーダー達、「何が？」

私は精一杯の抵抗をした。いじめっ子達は「覚えておけ」と言わなくなった。明らかに私をにらみつけて去った。明らかに私をいじめる側につかせる誘いだった。Aさんを一人ぼっちにさせたかったのだ。私は、もういじめる側の仲間に入る気は全然なかった。むしろ、Aさんのことが気になった。なぜ罪もない優しいAさんが、こんなにおびえて学校に来なくてはならないのか。

私は考えた。私にできることは何だろうか。私もいじめられているからできることが一つあった。それはAさんに手をさしのべてあげることだった。いじめられる中で、私が一番してほしかったことを今、してあげなければと思った。私はAさんに心の底から思いをこめて言った。「あんたは一人じゃないよ」たった一言だったけど、ちゃんと伝わった。

Aさんは泣きながら、「ありがとう」と言った。翌日、Aさんの笑顔がまぶしく輝いていた。私、助けられたんだ。とてもうれしかった。もう私も一人でないことを感じた。私とAさんは、い

じめを受けていることを先生や親に話した。

学級では、「いじめ」について話し合った。司会になった私は、まず自分がどんないじめをし、どんないじめをされたかをかかすことなく話した。他のいじめた人達、いじめられた人達も真実を正直に話してくれた。先生は、いじめは人の自由、平等、幸せに生きる権利をこわす行いだからあってはならないことを分かりやすく話された。私達は、この学級からいじめをなくすことを誓い合った。

あれから二年、今私達は中学一年生。やっぱり、あの時から変わらない顔ぶれの学級である。でも、あれ以来一度もいじめは起こっていない。男女を問わず仲が良く、誰でも思ったことが自由に言える楽しい学級である。皆さん、いじめを見たり聞いたりしたら知らんふりをせず、必ず、思いやりの手を差し伸べてほしい。先生や親などに知らせることも一つの思いやりだと言える。私は「この世の中にいじめはあってはならない」ことをこれからも訴え続けていきたい!

平成19年度人権標語優秀作品
つなごうよ心のアーチで 僕と君
七五三 和哉さん